

# 物体の接近による切迫感が時間知覚に及ぼす影響の検討

打田 淳

本研究の目的は、危機的状況において、物体の接近による切迫感が時間知覚にどのような影響を及ぼすのか検討することである。

本研究では、実験を2つ行った。実験1では、原付が停止、横移動、ななめ移動、ななめに通り過ぎる途中で急に向かってくる移動をする3D動画を用い、撮影した動画の再生速度を4s, 5s, 6sに変えることで、物体の移動速度も変化させ、実験参加者にその動画の時間の長さを評価させ、その動画の危険度も評価させた。実験2では、3D動画ではなく、VR動画を用い、移動速度の種類を4s, 4.5s, 5s, 5.5s, 6sに増やした。

その結果、実験1では、再生時間、移動方向が時間知覚に影響を持つが、移動の有無が時間知覚に影響を持つかどうかはわからなかった。詳しく述べると、再生時間が短く、移動方向がカメラに向かう方が危険度を高く評価され、また、再生時間が短い方が知覚時間をより長く評価し、再生時間の長い条件のときは移動方向がカメラに向かうときに時間を長く知覚することが示された。実験2では、移動の有無、移動の方向、再生時間が時間知覚に対して影響を持つことが示された。詳しく述べると、移動がある条件で時間を長く知覚し、接近があり、移動速度の速い条件で時間を長く知覚した。また、危険度について、接近があり、移動速度の速い条件で危険度が高く評価された。

実験1、実験2の結果から、危険度が高く評価された条件で時間が長く知覚されることがわかった。実験参加者が危険度を高いと評価したことは、実験参加者が切迫感を感じているということであり、物体の接近による切迫感によって潜在的恐怖を伴い、覚醒度や注意喚起度が増加し、体内のペースメーカーや注意ゲートを通過するパルスが多くなることで、時間を長く知覚すると考えた。このことから、危機的状況において時間知覚に影響を与えるのは恐怖だけでなく、物体の接近による切迫感にも時間を長く感じさせる効果があると示唆された。(応用認知心理学)